慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オンライン授業における協働学習の可能性：「発表5B」のreflectionシートの分析を通して
Sub Title	
Author	石塚, 京子(Ishizuka, Kyoko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2021
Jtitle	日本語と日本語教育 No.49 (2021. 3) ,p.97- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	授業報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20210300-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』49：97–116（2021.3）

オンライン授業における協働学習の可能性

―「発表 5B」の reflection シートの分析を通して―

石　塚　京　子

1. はじめに

2020 年度春学期開始直前、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、全塾的にオンラインによる遠隔方式を活用した授業運営が推奨され、日本語・日本文化教育センターでは「Web 会議システム」を利用した授業形態をとることになった（この授業形態を本稿の中では「オンライン授業」と呼ぶ）。その後も夏から秋にかけて新型コロナウイルスの感染は広がりを見せ、秋学期も引き続きオンライン授業が行われることが決定した。

オンライン授業も対面ではあるが、教室で行われる授業のように人と人とを隔てる物がない空間に一同が会することはできず、PC やスマートフォンといった通信機器を媒介してはじめて成り立つ対面型授業である。そのため通信機器や通信環境によっては対面できない状況も生じることがある一方で、環境さえ整えばどこからでもいつでも繋がることができるという利点を持つ。

これまでの教室対面型では「協働」の概念を重視して授業のデザインを行ってきたが、予想だにしなかったオンライン授業に突如切り替えることが余儀なくされ、「協働」による学習とは何かという原点に立ち返ることになった。本稿は、教室対面型の授業とは形態の異なるオンライン授業でも学生間の「協働」は可能なのかを 2020 年度秋学期に担当した「発

表 5B」の実践から分析と考察を行うものである。分析には学生が書いた reflection シートを使用して学生は①何を振り返り、②どのようなことに気づき、③どう変容して成長したのかを考察し、その可能性を探る。

2. クラス概要

本稿は、慶應義塾大学日本語・日本文化教育センターの日本語研修課程に設置された科目「発表 5B」において 2020 年度秋学期に行った授業の内容に基づいたものである。以下にクラスの概要を示す。

履修者数：5 名（出身地と性別、受講場所は以下の通りである）

教材：担当者作成教材

目標：クラスの到達目標を以下の 3 つに定めた。

①今まで勉強した文法やことばを使って言いたいことを聞いている人に正しく伝えられるようにする。

②自分の意見や経験をわかりやすく話せるようにする。

③聞いている人からの質問に答えたり、他の学生の発表を聞いて質問したりできるようにする。

表 1　「履修者の出身地と性別、受講場所」

呼び方	出身地	性別	受講場所
学生 A	中国	女性	母国／2020 年 11 月からは日本
学生 B	中国	男性	母国
学生 C	ヨーロッパ	女性	母国／2020 年 11 月からは日本
学生 D	台湾	女性	母国
学生 E	中国	女性	母国／2020 年 11 月からは日本

（個人情報保護のため、5 名の学生を学生 A～学生 E と呼ぶことにする。学生 C の出身地をヨーロッパとしたのは国籍を明記すると学生を特定できる可能性が生じるからである。）

使用した Web 会議システム：Zoom

授業形態：リアルタイム方式＋オンデマンド方式

リアルタイム方式とは web 会議システムを使用した対面授業、オンデマンド方式とは授業支援ツールや Box などを使用して課題を送付し、添削作業を行う授業を意味する。「発表 5B」は、上記 2 つの組み合わせで成り立っている。

尚、以下の授業の進め方における (3)(4) がリアルタイム方式、(1)(2)(5) がオンデマンド方式によるものである。

授業の進め方：一つのテーマにおける発表は以下の (1)〜(5) の順に従って実施した。

発表原稿となる作文（〈発表の手順〉(1)）を書き始める前に、リアルタイム方式の授業で担当教師が作成した「発表のやり方」を 2 週に渡って導入した。教材の内容は、スピーチの流れ、必要となる表現例をまとめたものである。

〈発表の手順〉

(1) 与えられたテーマで 400 字〜500 字程度の作文を書いて提出（メール添付）する。　＊各回のテーマは表 2 を参照のこと。

(2) 教師は添削して返却する。

(3) 教師はオンライン授業で全員に向けてのフィードバックや、面談方式での個別指導を行う。読み方の練習をペアでさせる。

(4) 添削された作文を覚えて発表し、発表後に質問に答える。

(5) 200 字程度の reflection シートを提出（メール添付）する。
シートには発表はどうだったか、友だちからの質問はどうだったか、発表から何が学べたかなどを書くように指示した。

3. 「協働」の概念と「発表 5B」の授業デザイン

教室対面型の授業をデザインする際に重視してきた「協働」という概念

表 2　「発表のテーマと目標」

回	テーマ	目標
1	自己紹介	自分に関することを説明する
2	日本語の勉強	
3	私の国の有名な○○	
4	一番○○かった／だった思い出	
5	東京に住みたいですか	自分の意見を述べる
6	日本はどんな国ですか	
期末	（自由）	

について説明する。

池田・舘岡 (2007) では、日本語教育における協働とは，多文化背景の者同士の「対等」を認め合い「対話」を重ね、対話の中から共生のための「創造」を生み出すべきものだとし、ピア（peer：仲間）と協力して学ぶ（learn）方法をピア・ラーニングと呼んでいる。ピア・ラーニングにおける学びは、1)「学生が自分も相手もお互いに貢献できる互恵的存在であること」（相互リソース化)、2)「対話から『問い』が生まれるプロセスを重視すること」（批判的思考の獲得)、3)「背景の異なる多様な『他者』と向き合い、認め合う態度を身につけること」（社会的関係の構築）の 3 点にまとめることができる（大島他 2012)。

「発表 5B」においては、【2. クラス概要】に掲げた 3 つの目標（①聞いている人に正しく伝える、②意見や経験をわかりやすく話す、③質問に答える・質問する）に、履修した学生全員を到達させなければならない。しかし、教師からの一方的な知識の教授や記憶が中心となる授業では、日本語を使った発表を体験する場を提供できるものの、それだけでは学生の深い思考力や日常生活で予期せぬ問題に遭遇した際に臨機応変に解決する能力を身につけることは難しいと考える。つまり、①は達成できても、

②③の達成は非常に困難である。授業で教えられることには限界があり、学生が出会う全ての場面を想定してそこで必要となる日本語を不足なく扱うことはできないため、解決が難しい問題に出会っても自分一人で臨機応変に対応できる能力の育成こそが重要だと考える。このような点を念頭に置きながら「発表 5B」では以下に配慮して授業デザインを行った。

(ⅰ) これまでに得た日本語の知識を広める機会にする。

(ⅱ) 対話を中心とした進め方で、インターアクションの活性化を目指す。

(ⅲ) 他者とのインターアクションの過程で理解の進化を目指す。

(ⅳ) インターアクションの中で解決が難しい問題に出会うことを想定し、そこでどう対応すればいいのかを知る機会にする。

(ⅴ) インターアクションによる他者との交流で人間関係を構築する力を養うことを目指す。

このデザインに沿って授業を実施し、クラス目標に掲げた①～③に到達するためには、「協働」の概念を持つ活動が必要となる。なぜなら①～③に到達するには他者の存在が不可欠であり、他者とのインターアクションを通じて到達点に近づくことができると考えるからである。この「協働」の概念を持つ活動として位置付けているのが「添削された作文を覚えて発表し、発表後に質問に答える」(【2. クラス概要授業の進め方〈発表の手順〉】における (4)) であり、授業の核となっている部分である。特に質問に答える活動は、事前に準備された質問への返答ではなくその日の発表を聞いたクラスメート（他者）が発表内容に疑問を感じたり、より詳細な説明を求めたりするものなので、何が飛び出すかわからない。発表者が質問にきちんと答えるためにはたえず自身と向き合い、発表内容に関する自分の考えを深めておく必要がある。それに対し【2. クラス概要授業の進め方〈発表の手順〉】における (1)～(3) は、①聞いている人に正しく伝えるという目標を達成するためのものである。

4. reflection シート

【2. クラス概要　授業の進め方〈発表の手順〉】における最後の作業 (5) として、200 字程度の reflection シートの提出がある。発表が終わるごとに reflection を行うが、これには重要な意味がある。

この reflection という作業がなければ、「添削された作文を覚えて発表し、発表後に質問に答える」という活動によって、正しい表現で発表をし、発話数も増えて授業が活発になったものの、実際に学生が何をどのくらい学んだのかを教師が測り知ることは難しいであろう。同様に学生にとっても日本語をたくさん使って話したような気がするが、何を学び、自分にはどのような成長が見られたのかが良くわからないということになる。

しかし、この reflection シートを書くことで学生は自然と発表を振り返り、じっくりと自問自答しながら内省する機会を得ることになる。更にその内省した思考過程を外化する作業によって思考が整理されるのである。つまり学生は、発表を振り返る→自問自答しながら内省する→思考を整理する→外化するといった一連の作業を行うことになる。この作業の結果、学生は自分の思考過程を可視化した reflection シートを見ることによって自身の学びや変容に気づくことができると考える。一方、教師も学生の発表する姿を外側から観察するだけでは十分に把握できなかった学生の変容をこのシートを通して知ることができるのである。

次の 5 章では「会話 5B」で提出された reflection シートを分析して、学生の気づき、変容からの成長を観察する。

5. 分析と考察

5.1 reflection シートの横断的分析と考察

「発表 5B」では、通常授業における 6 回の発表と期末試験での発表で、計 7 回の発表を実施した。その中で、まず第 1 回の発表後に提出させた reflection シート（資料 1「reflection 自己紹介」）から学生は何を振り返り、

そこにはどのような気づきがあったのかを横断的に分析する。分析対象とした文には、資料 1 の該当する箇所に下線を引いた。尚、資料 1 の文はオリジナルのままで手を加えていない。そのため、筆者の理解と学生の意図することに乖離が生じている可能性もないとは言えないが、筆者の理解で分析を進めていく。下線を引いた分析対象の記述文を共通する内容でまとめると、学生は以下の a.〜h. の 8 項目について振り返り、様々な気づきがあったと考えられる。

（・の文は、分析対象として下線を施し抽出した学生の文である。）

a. 自分の発表について
- うまくできてよかった
- 次の発表はちゃんと覚えておかなければなりません

b. 質問に対する自分の答えについて
- 質問もちゃんと答えてあげた
- 質問を答えた時、いつも緊張してうまく答えませんでした
- どんな質問が出てくるかどうか先に考えましたが、やはり考えていなかった質問がどんどん出てきた

c. クラスメートの発表の聞き取りについて
- 自分の語彙が足りないため、あれこれが分からないところがあった
- 細かい部分は聞き取れませんでした

d. クラスメートに対する質問について
- どうやって質問するのかちょっと迷っている
- 結局ちょっと気まずい質問をしてしまった
- つまらない質問しか聞きませんでした

e. クラスメートからのことばについて
- 友達は私が良いコミュニケーション能力を持っていると言いました
- 友達からの質問は大変役に立っていると思います。A さんからな

ぜ……かという質問はもう一度自分について考えさせました。

f. クラスメートとの関係構築について

- 皆は活躍に話し合っていて、違和感がない
- 一層親しくなった

g. 今後の目標について

- この点（*質問すること）についてよく頑張ていきたいかなと思う
- これからもこの場合（*予想していなかった質問）に対応できるように頑張ると思っています
- これから、話す能力を上げるために努力します

（　　）内の*の部分は筆者が解釈を加えたものである。

h. 授業の感想

- 面白かった
- 興味深かった
- 発表はとても楽しかったです

以下では、学生が第 1 回の発表を振り返って様々なことに気づき、どう変容したのかを考察する。まず、a. 自分の発表、b. 自分の答えを振り返り、できたのかできなかったのかという自己評価を行い、できなかった時は自分なりの対応策を述べている。「できない」で終わってしまったのでは学生の変容を見ることができず成長にはつながらないが、対応策に言及するに至ったことからは学生が自問自答を繰り返して何とか困難を乗り越えようとする姿が見える。その姿こそが小さな成長を遂げた証と言えるのではないかと考える。

次に、c. 発表の聞き取り、d. 相手への質問については難しい、できないといったマイナス点を述べていて、これに対してはまだ解決策を見つけることはできていない。しかし、「ちょっと気まずい質問」「つまらない質問」という記述からは、今回のような質問はよくない、もっと違った視点

で質問をしなければならないという気づきがあり、模索する様子が見て取れる。今はまだ模索中であり、変容への途上段階と考える。

また、f. 関係構築、g. 今後の目標、h. 授業の感想の記述からは、今後の授業への期待が感じられ、学習意欲の高まりという点から学生の変容と捉えることができのではないかと思う。

この a.〜h. の中で、筆者が一番関心を持ったのが「e. クラスメートからのことば」である。用例として挙げたどちらの場合も自分が気づいていなかった、あるいは考えていなかったことであるが、クラスメートからのことばによって新たな自分を掘り起こしたり、再度自分自身を見つめ直すきっかけとなったりした。これこそ、自分自身をより深く、より発展的に理解することに繋がり、「自己紹介」というテーマのもとで学生が大きく変容し、成長した一例と考えられる。

資料 1 「reflection　自己紹介」

学生 A

今度の発表で、自分の欠点を振り返っていました。発表を準備していたとき、クラスメートは私の強み何ですかと私に尋ねるかもしれませんと思っていましたが、案の定、私は聞かられました。

いつも自分の欠点を見ていますが、自分の強みが発見できませんでした。発表が終わった後、ちゃんとその質問を考えていました。e 友達は私が良いコミュニケーション能力を持っていると言いました。将来は粘り強い人間になりたいです。

学生 B

発表は思ったよりも a うまくできてよかった。発表本体もストレスなく、無事に終わったし、その後の 1。ただ他のみなさんの発表について d どうやって質問するのかちょっと迷っている。多くの場合は「もう内容をちゃんと理解しているのに、何か何の質問もないな」みたいになり、d 結局ちょっと気まずい質問をしてしまった。やっぱり g この点についてよく頑張っていきたいかなと思う。

学生 C

皆がしてくれた自己紹介と Q & A は h 面白かったし、皆の性格が分かるように始めたと感じる。自己紹介をした後のディズカッションは同じぐらい h 興味深かった。f 皆は活躍に話し合っていて、違和感がないと思った。時々、c 自分の語彙が足りないため、あれこれが分からないところがあった。特に、珍しい言葉や特定な言葉（大学の名前・コースなど）が分かりづらかったが、ほとんどの発表が分かるには問題ではなかった。

学生 D

最初は、日本語を聞くのは慣れないから、同級の発表の内容をたいていわかりましたが、c 細かい部分は聞き取れませんでした。それで、d つまらない質問しか聞きませんでした。そして、日本語もボロボロ話せたから、もっと勉強しなければならないと感心しています。

私は同級からの b 質問を答えた時、いつも緊張してうまく答えませんでした。そのために、発表を準備した時、b どんな質問が出てくるかどうか先に考えましたが、やはり考えていなかった質問がどんどん出てきた。だから、g これからもこの場合に対応できるように頑張ると思っています。

学生 E

先週、自己紹介の h 発表はとても楽しかったです！勉強しながら楽で授業を受けるのは素晴らしいです。私の番の時、ちょっと緊張して、話したいことを忘れるところでした。a 次の発表はちゃんと覚えておかなければなりません。e 友達からの質問は大変役に立っていると思います。e A さんからなぜ英語教師ではなく、日本語教師になりたいのかという質問はもう一度自分について考えさせました。私は静かなタイプで英語より日本語がもっと自分に合っていると私は思います。そして、ほかの友達に質問を聞かれて、皆さんとの付き合い f 一層親しくなったと実感します。また、質問を答える時、言いたいことはすぐ口に出し、正しい情報を伝えることはまだできていないので、g これから、話す能力を上げるために努力します。

5.2　reflection シートの縦断的分析と考察

5.1 では、第 1 回の reflection シートを横断的に分析し、考察した。ここ 5.2 では、第 1 回～第 6 回のシートを縦断的に分析、考察を行う。一人の学生の reflection シートを縦断的に分析することは、時間の経過とともに学生にどのような変容が起き、どう成長できたのかが明確に示せると考えたからである。

分析対象として学生 B と学生 D の reflection シートを選択した。この 2 名は、5.1 での分析で、振り返り項目の d. クラスメートに対する質問について「ちょっと気まずい質問」「つまらない質問」をしてしまったが、解決には至らず模索の段階であり、変容の途上にある学生である。その模索段階から発表を重ねるごとにどう変容し、どう成長したのかを観察したいと考えて縦断的考察の対象に選んだ。

5.2.1　学生 B のケース

学生 B の分析から始めるが、手順は 5.1 と同じである。まず、巻末に掲載した資料 2 で、分析対象とする文に下線を引く。次に、この下線を施した文を、a.～h. の振り返りの項目ごとに第 1 回から第 6 回の発表順に並べ、縦断的に毎回の発表でどのような気づきの変化があったのかを見ていく。

a. 自分の発表について

> 1 回目：うまくできてよかった。
> 2 回目：発表は一番目だから、多少ストレスがあった。
> 3 回目：前回よりうまくできたと思う。
> 4 回目：最初話のスピードは良かったと思うのですが、だんだん速くなった。
> 5 回目：私だけが「帰属意識」という概念を言及した。

自分の発表に関しては 1 回目～4 回目までは自己評価としてどうだった

のか（できたのかできなかったのか）という結果だけの振り返りで終わっているが、5 回目は結果ではなく、内容に言及している点が注目に値する。この回は、「帰属意識」という少し抽象的な内容で意見を述べたのだが、それに対するクラスメートからの反応に満足したような記述になっている。特に「私だけが」という記述からは、単に結果を重視していた初期の頃とは違い、発表内容がクラスメートにどう受け入れられるのか、あるいは他のクラスメートとの発表の違いは何かを自分で見出せるようになったと考えられる。発表で大切なことは表面的な技術の問題（上手にできること）だけではなく、クラスメート（他者）の心に刺さるような深い内容も必要であることに気づいたことがここでの成長だと言えるであろう。

b. 質問に対する自分の答えについて

1 回目：質問もちゃんと答えてあげた。

2 回目：質問されるときは少し困った。
その場で直ぐ答えることが難しいと思う。よく考えなければ「お寿司を食べたい」のようないい加減な返事しかできない。
「質問されるかもしれない質問」を考え、予め準備した方がいい。

4 回目：皆さんの質問がいじめることなく、易しかったから、ほとんどちゃんと答えた。

自分の答えについても、1 回目は結果として、きちんと答えられたのか否かに目が向いていた。しかし、2 回目の発表で困った状況に遭遇し、その場は簡単なごく一般的な答えで凌いだようだが、それが反省材料となり、質問に窮することなく適切に答えるには「質問されるかもしれない質問」を予測して準備することの重要性に気づいたことが学生の成長と考

える。その後の発表で実際に準備したかどうかまでは確認できていないが、この気づきが今後の発表の質を上げることになると期待できる。また、reflection シートを書くという作業がなければ、「今日の発表は簡単な答えしかできなかったな」で終わってしまった可能性もあるが、この作業を通してできなかった自分と対峙し、自問自答した過程を外化することで具体的な対応策が生まれたと言えるのではないであろうか。

4 回目の記述内容にも注目したい。1 回目は「ちゃんと答えてあげた」であったものが「ちゃんと答えた」となっている点、そして「皆さんの質問がいじめることなく、易しかった」という点である。この「いじめることなく、易しかった」という記述は、1 回目の d. クラスメートに対する質問についてのところで「ちょっと気まずい質問をしてしまった」ことと大きく関係しているのではないかと考える。1 回目は自分の気まずい質問でクラスメートを窮地に追い込んでしまったのであろう。この点（質問の内容や方法）について頑張りたいと明記していることからも、学生にとってはこのやりとりが非常に記憶に残る出来事になったようで、質問さえすれば何でもいいということではなく、質問する時には相手への配慮や内容の質が大切だということに気づいたのではないだろうか。そのような記憶が残る中、4 回目の発表では、クラスメートからの「いじめることなく、易しい」質問にきちんと答えることができ、より一層相手への配慮の重要性を知った事例と言える。ここから、発表という授業における「質問する」ことの意味、「質問とは何か」を学んだと考える。

更には学生 B を縦断的に分析した中で、5.1 の横断的分析の中には現れなかった新たな気づきを発見した。9 番目の気づきとして i. 多様性についてという項目を立てることにした。

i. 多様性について

> 5 回目：様々な視点から考えて、違う答えになった。それももちろんだ。
> 6 回目：同じ事実について皆の観点がだいぶ異なっている。
> 大部分の社会矛盾には正解ということがないと思う。

発表の 5 回目と 6 回目は、表 2 でも示したが自分の意見を述べることが目的となっている。それぞれの reflection シートに「違う答えになった」「皆の観点がだいぶ異なっている」という記述があるように、意見には多様性があることを認識した。その上で「それももちろんだ」「社会矛盾には正解ということがない」と、その多様性を受け入れていることもわかる。

5.2.2 学生 D のケース

縦断的分析の対象として学生 D を選んだ理由を以下のように述べている。「学生 D は第 1 回の発表で d. クラスメートに対する質問に困難を感じたが、解決には至らず模索の途上にある。発表を重ねるごとにその模索がどう変容し、学生がどう成長したのかを観察したい。」

実際に分析を始めてみると、驚いたことに、第 1 回の発表と第 2 回以降の発表に対する reflection シートの記述内容に大きな変化が生じていた。第 1 回の発表では、b（質問に対する自分の答えについて）、c（クラスメートの発表の聞き取りについて）、d（クラスメートに対する質問について）、g（今後の目標について）といった自分の日本語力に関心が向いていた。それも全てがネガティブな「できない」という内容であった。一方、巻末の資料 3 を見ればわかるように、第 2 回以降では、自分の日本語力に関するネガティブな記述は消え、クラスメートからのことばでポジティブになったりクラスメートに賛辞を送ったりする内容に変化しているのである。

a.〜h. の気づきの項目の中で、2 回目以降は e（クラスメートからのこと

ば）に関する記述が大部分を占めている。その代表的な例を以下に示す。

2 回目：C さんのおかげで、もう一度漢字の美しさを覚えました。
これからも同級からの違う視点がもらえることを楽しんでいます。
3 回目：今回の発表は、新しいことをたくさん知ってもらえて、とても面白いと思います。
4 回目：皆さんと一緒に、……という話を話しました。
皆は…について、……から、本当に凄いと思います。

どのような理由で、これほど大きく記述内容が変化したのかは不明だが、これは非常に大きな成長と言える。学生 D の reflection には、もう一つ特徴がある。5 回目と 6 回目は意見を述べることを目的とした発表の場であったが、その 2 度の振り返りとして、自分とは異なる立場をとる学生への意見が述べられていたのである。以下がその記述である。

5 回目：Aさんは、とても心強い人だと思います。日本にいても、自分は自分なりに行動することを決めます。私は、どちらかというと、日本人らしくて行動すると思います。
6 回目：Cさんは、日本は柔軟性が低い国だと言いました。……。ルールがあれば、ある程度の公平を維持することができると思うからです。

学生 D の reflection には、この他にも A さんと C さんに関する記述が多く、この二人からたくさんの影響を受けたことがわかる。上記の記述からは、異なる立場を表明したいが、授業で直接対峙する勇気を持てず reflection シートへの書き込みで教師にだけでも伝えたかったのであろうと推測する。しかし、裏を返せば、これは立場の異なる学生への配慮と敬

意、関係構築のための戦略と捉えることができる。発表を繰り返すことで、直接伝えるべきこと、回避すべきことを知ったと言え、人間関係構築における成長を遂げた例と考えることも可能であろう。

6. まとめ

5 章では、毎回の発表後に提出した reflection シートの一部を横断的・縦断的に分析し、学生は何を振り返り、どのようなことに気づき、どう変容して成長したのかを考察した。発表における技術的なことや発表内容、人との関わり方、人それぞれが異なる考え方を持つことなど a.〜i. の 9 項目について振り返りをしていることが今回の分析からわかった。そして、そこからは、いわゆるピア・ラーニングにおける学びとしての 1）お互いが互恵的存在であり（相互リソース化）、2）対話から「問い」が生まれ（批判的思考の獲得）、3）多様な「他者」と向き合い、認め合うこと（社会的関係の構築）が考察できた。

これは、「添削された作文を覚えて発表し、発表後に質問に答える」という「協働」の概念を持つ活動を、インターアクション重視の授業で実施した結果であり、この活動によって学生はいろいろな面で成長できたと言えるであろう。このようにオンライン授業でも「協働」は可能であり、この概念を取り入れた活動により学生は成長できることがわかった。

また、①聞いている人に正しく伝える、②意見や経験をわかりやすく話す、③質問に答える・質問する、という「発表 5B」クラスで掲げた 3 つの目標にも、程度の差は多少あるものの全員がほぼ到達できたと考える。

しかし、分析の対象者が変わっても今回と同じように「協働」が可能であり、ピア・ラーニングによって学生が成長できるという結果が得られるのかどうかは不透明なため、今後は更に多くのデータを横断的にも縦断的にも分析していく必要がると思われる。教室対面型の授業が再開されたら、同じように reflection シートの提出を課してそれを分析し、結果をオン

ラン授業と比較することも今後の課題としたい。

参考文献

池田玲子・舘岡洋子 (2007)『ピア・ラーニング入門―創造的な学びのデザインのために―』ひつじ書房

大島弥生・大場理恵子・岩田夏穂・池田玲子 (2012)『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語　コミュニケーション:プレゼンテーションとライティング』ひつじ書房

毛利貴美（2017）「インターネットを通じた日本語教育実践」川上郁雄編『公共日本語教育学―社会を作る日本語教育―』くろしお出版

資料 2　学生 B の reflection シート

1. 自己紹介

発表は思ったよりも a. うまくできてよかった。発表本体もストレスなく、無事に終わったし、その後の b. 質問もちゃんと答えてあげた。ただ他のみなさんの発表について d. どうやって質問するのかちょっと迷っている。多くの場合は「もう内容をちゃんと理解しているのに、何か何の質問もないな」みたいになり、d. 結局ちょっと気まずい質問をしてしまった。やっぱり g. この点についてよく頑張っていきたいかなと思う。

2. 日本語の勉強

今週の a. 発表は一番目だから、多少ストレスがあった。日本語の発音やアクセントがいいかよく分からないのだが、b. 質問されるときは少し困った。例えば、「日本に行ったら、何を体験したい」とかの質問に対し、b. その場で直ぐ答えることが難しいと思う。よく考えなければ、「お寿司を食べたい」のようないい加減な返事しかできない。やはり発表の前に自分の発表内容について b.「質問されるかもしれない質問」を考え、予め準備した方がいいのだか。

3. 私の国の有名な○○

前回の授業でもう練習したから、今回の授業の前にも友達が何について発表するつもいだったか少し知っていたし、自分のスキットも何度も読んだことがあった。だから、a. 前回よりうまくできたと思う。それでも、不足の点があった。まず、やはりネットの調子が時々悪くなって、これから携帯のインターネット共有を使ったらいいかな。そして、d. 硬い社会問題について（九九六とか）質問することはちょっと難しいと思う、よく考えなければ、一方的な観点を持つかもしれない。

4. 思い出

今回発表した内容は前より少し長くなったかで、前半と後半のリズムが違

うようになってしまうそうだった。a. 最初、話のスピードは良かったと思うのですが、だんだん速くなった。また、前回の授業に欠席だから、今回は私だけの発表になっていた、。そのせいで、少し緊張してしまった。幸いで、b. 皆さんの質問がいじめることなく、易しかったから、ほとんどちゃんと答えた。

5. 東京に住みたい？

今回は「東京に住みたい」という主観的な観点を述べるテーマで発表した。東京はやはり魅力的な点と人を遠ざける点両方もあろう。出身国や年齢などの違う皆さんは、様々な視点から考えて、違う答えになった。それももちろんだ。同じ人でも、年齢によって、違う観点をもつかもしれない。その中、a. 私だけが「帰属意識」という概念を言及した。身の回りの友達もそうだ、皆が「身のいる場所だけ家である」のような考えを持っている。若者にはやはりそれは少し古くさすぎるのか。

6. 日本はどんな国？

今回のテーマは「日本はどんな国？」で。皆は自らのイメージで日本の社会や精神について発表した。その中、おもしろい魅力的な点もあったし、生活によく考えていない深刻な問題もあった。国籍や小さい頃から身の回りの環境や性別どかの違いがある以上、やはり同じ事実について皆の観点がだいぶ異なっている。自然科学や数学の問題と違って、大部分の社会矛盾には正解ということがないと思う。したがって、このクラスの皆と同じに、いろいろな観点が共存し、そして、誰一人にも属しない人間全体の「共通」の未来をつくるのができることは、自由社会のプラスの一つだと思う。

資料 3　学生 D の reflection シート

1. 自己紹介

最初は、日本語を聞くのは慣れないから、同級の発表の内容をたいていわかりましたが、c. 細かい部分は聞き取れませんでした。それで、d. つまらない質問しか聞きませんでした。そして、日本語もボロボロ話せたから、もっと勉強しなければならないと感心しています。

私は同級からの b. 質問を答えた時、いつも緊張してうまく答えませんでした。そのために、発表を準備した時、b. どんな質問が出てくるかどうか先に考えましたが、やはり考えていなかった質問がどんどん出てきた。だから、g. これからもこの場合に対応できるように頑張ると思っています。

2. 日本語の勉強

皆は日本語を勉強する理由がそれぞれですが、日本と日本語の魅力に惹かれて日本語を勉強することが同じだと思います。

今日 e.Cさんのおかげで、もう一度漢字の美しさを覚えました。いつも漢字を使っていますが、漢字の美しさはいつか無関心になることを反省しました。

留学は、いろいろな国からの学生と一緒に勉強することだから、新しい視点をもらえます。それはとてもおり難いことだと思います。

e.g.これからも同級からの違う視点がもらえることを楽しんでいます。

3. 私の国の有名な○○

e. 今回の発表は、新しいことをたくさん知ってもらえて、とても面白いと思います。私は旅行が好きなので、△△が行きたいです。今度、機会があれば、ドラゴンの伝説について、C さんにもっと詳しく聞こうと思います。

しかし、一番興味を持つのは、A さんが言う 996 問題です。これは、中国だけでなく、いろいろなところもある問題だと思います。人々は、経済成長を追うに伴って、自分の生活も崩れる。ワークライフバランスがどうすればいいかということはもう考えなければならない課題になっていると思います。

4. 思い出

今度 e. 皆さんと一緒に、「もしお母さんになったら、どうやって子供を育てる」という話を話しました。e. 皆は子供の教育について、もういろいろなことを考えましたから、本当に凄いと思います。私は女性として、子供のことを一ミリも考えませんでした。なぜなら、今自分の未来を考えるのはもう大変だからです。もし自分は自分ですら養えなければ、子供にも成長させできないと思います。お母さんになったら、責任が非常に重いです。だから、心を準備できない私にとって、まだ遠い話だと思います。

5. 東京に住みたい？

私は、東京での生活が憧れているので、東京に住みたいです。しかし、東京に住めば、お金がかかるし、生活のリズムもはやいし、大変だと思います。旅行した時、優しい日本人にあったことがたくさんありましたが、やはり時々私はただの観光客で、ここに属しない感じがありました。Aさんは、とても心強い人だと思います。日本にいても、自分は自分なりに行動することを決めます。私は、どちらかというと、日本人らしくて行動すると思います。こうすれば、私が日本人ではない寂しさは少なくなるのではないかと思います。

6. 日本はどんな国？

Cさんは、日本は柔軟性が低い国だと言いました。日本人は、いかにもルールに対していつも厳しそうですが、観光客に対して親切な面もあります。例えば、こんなことがありました。友達は、スカイライナーの切符を買っておきましたが、乗る時間を間違えて、列車に間に合いませんでした。駅員は、おそらく彼らは可哀想だとみえて、そのままで次の便に乗らせました。私は、この話を聞いて不思議に思っていました。彼らにとって、これは確かにいいことです

が、私の場合は、やはり自分で時間を守るのは大切なことだと思います。ルールがあれば、ある程度の公平を維持することができると思うからです。